
魔砲使い黒姫－魔を司る剣－

カズト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲使い黒姫―魔を司る剣―

【Nコード】

N8142A

【作者名】

カズト

【あらすじ】

ある日、立ち寄った村で出会った老人からある剣を壊して欲しいと頼まれる零と姫子。その刀の名は”エペタム”その剣は十年前の黒姫と浅はかならぬ因縁を持っていた。零も大怪我を負い、姫子も追い詰められて窮地に追い込まれてしまう。果たして姫子を追う零は間に合うのか!?

一装5, 5弾一魔を司る剣く序章

一十年前一

世界統一戦争。”鬼丸帝国”とは逆を陣取る最大勢力”黒魔法師団 領地内”

「おい、大変だっ!!」

若い兵士の一人が慌てた様子で仲間の元に駆け寄る。警備兵が迷惑そうに見てるがちっとも気にしていない。

「どうしたんだよ。そんなに慌てて……」

仲間の内の一人が若い兵士に尋ねる。騒がしい男は直も興奮した様子で訳の分からない言語を発している。

「落ち着けエペタム。はい、深呼吸」

息を”すってゝはいてゝ”を繰り返す若い兵士。だが、勢い余って途中で咳き込んでしまった。

仲間に背中を擦られながらやっと若い兵士は平静を取り戻す。

「おい、大変だぜっ!! 南の”鬼神”様の城が何者か陥落されたらしいんだ」

それを言いきった後に”どうだ”と言わんばかりの顔をする若い兵士。

しかし、皆の反応はなぜか薄かった。皆一様に呆れた目線を兵士に浴びせる。

「お前なあ、そんな事は俺たち全員とっくの昔に知らされてんだよ」若い兵士。いや、少年はそれを聞いて愕然とする。周りを見渡しても皆一様に頷いていた。

「お前は戦場に赴く大事な時だって言うのに……よりによって高熱出しちまったんだから知らねえんだよ……」

まあ、仕方ないって言えばそれまでだけどよ」

この中では一番年長者らしき初老の兵士がそう言って彼を慰める。
「うっ！ 緊張して眠れなかったんだよっ！！」

少年はぼつが悪そうにわんわん叫ぶ。それでも周りの連中は笑みを浮かべて少年を見ていた。

「本当はお前ら子供にこんな事はさせたくないんだがな。このご時世じゃあそれも叶わねえ」

老兵士はしんみりと少年の肩を抱いて言った。周りも心なしか暗くなる。

「仕方ないだろ。家が苦しいんだから」

そう言って彼は目を伏せる。少年の父親は戦死し家族を助ける為に少年は兵士になった。

「たくつ、神になれるだかなんだか知らんがこんな戦争は早く終わって欲しいもんだ……」

老兵士は額に刻まれた深いしわを寄せそう締め括った。

——突如、城中に響き渡った轟音。

「こ、これは……」

少年がポツリと呟いた。他の兵士も一様に顔を引き締めている。

再び響く轟音。いや、爆音。

それは城中を揺れ動かしパラパラと壁の一部が舞い落ちる。

殆どの人間がすでに剣を取り鞘と一緒に腰に入れた。

「噂の敵さんが来たのかね」

老兵士は落ち着き払って言った。しかし、南の将軍。鬼神の城はここから相当離れている。

あの城を落とす程の軍勢がこんなにも早く攻めて来た事に皆、動揺していた。

彼らの宿舎から皆、城に向かおうとした。

しかし、次の瞬間――更に信じ難い出来事に彼らは言葉を失う。

凄まじい輝きを放つ光線が彼らの守るべき城を文字通り貫いた。その輝きは城門や塔、城壁などを破壊していく。

城の守護にあたっていた兵士達は混乱し、城はすでに機能を失っている。

崩れ落ちた瓦礫の山から腕がいくつも飛び出している。辺りを赤く染める鮮血。

――彼らの前には小さな山ほどはあるだろう蒼き巨龍が悠然と佇んでいる。

「な、何なんだよ。コレッ!!」

宿舎を出た少年は思いっきり叫んだ。それはその場にいた全ての兵士の言葉だった。

不意に”龍”がその空間に現れた。魔法という自然を捻じ曲げただけの法では不可能な技術だ。

天地を震わすような凄まじい咆哮を挙げる龍。

辺りを見れば次々と兵士が剣を落としていく。殆どの兵士が一瞬で戦意を喪失してしまったのだ。

その光景を意に介さず蒼き龍が巨大な口を開く。口から迸る蒼き輝き。

それはトドメと言わんばかりに城へ向けて蒼き光弾を放つ。綺麗に瓦礫の山へと変わる城。

蒼き龍は役目を終えたように一声、天に咆哮しながら消滅していく。

消滅した龍。その向こうの大きな城門からゆっくりと何者かが歩み寄ってくる。

――壮絶な美しさを放つ美女。

どれほどの美しさを持つ者でもそれを見れば己の限界に気づくこ

とが出来るだろう。

天上に住んでいる神々に限りなく近いであろう至高の美。それでいて底知れぬ強さを漂わせている。

女の手に握るは銃身が長い漆黒の拳銃。いや、洗練された大砲だろう。

「ひ、怯むな。陣形を組め」

部隊長の精一杯の指示に動こうとする兵士達。弓矢部隊が一斉に弓を引き絞り矢を弓につがえる。

弓が射られ数多の矢が侵入者に放たれた。それでも女は動きを止めない。

背中に大砲のような銃を収めた女。腰のホルダーに収めた回転式の黒い拳銃を取り出し呪文を唱える。

唱え終えた女は自らへと銃口を突きつけ引き金を引いた。弾倉が回転すると共に銃口から迸る光。

「鋼鎧五体弾」

その美しい声と同時に女に数多の矢が命中する。

――女は倒れなかった。

あまりの現実信じられない兵士達。彼らは今度こそ戦意を木っ端微塵に碎かれた。

女の身体中が鉄の黒い光沢を放っていたから。それはまるで全身が鉄の鎧に変化したかのように……

矢は根元からポツキリと折れてしまいパラパラと地面に落下していく。

「お前たちに用は無い……ここの大將を出せ」

目を瞑ってゆっくりと言い放つ女。いや、魔女。

しかし、誰も答えない。正確に言えば答える事が出来なかった。

辺りを包む痛いほどの沈黙。女はフンと鼻を鳴らすと真上を見上げる。

すでに彼女の鋼鉄化は解けていたが誰も戦おうとしなかった。

「部下が命を賭けているのに……お前はそこで高みの見物か？」

その言葉に一齐に彼女の視線を追う兵士達。しかし、真上に広がるのは真っ青な青空だけ……

女はほんの一瞬だけ黙り今度は銃口を虚空に向けた。

「だったら私が叩き落としてやるよ」

その言葉に空間が歪み黒衣のローブを着込んだ細面の男が姿を現す。

笑いながら地に足を付ける男。腕には刀身が長い長剣を持っている。

「魔砲使い」とはこんな辺境の地ではかなり珍しいですね」

笑顔で礼儀正しくお辞儀する魔法使い。

それは魔法で身を隠し空から地上から見下ろしていたこの城の主だった。

——魔砲使い、その言葉に兵士達が凍りつく。

その存在だけでもこんな所では珍しいし、まして”龍”を練り出せる人間は滅多にいない。

辺りは騒然となり恐怖に我を失った兵士がその場を敗走していく。去り行く兵士達を眺めながら男は無言で長剣を構えた。その先には逃げる兵士の姿。

放たれた紅き斬撃。それは兵士達を一気に葬り去っていく。

それでも女は男だけを見つめていた。

「フフ、動揺もしないとは……」

その言葉に女は不快そうにしながら再び呪文を唱え始める。周囲に生まれる魔砲陣。

男はそれでも眉一つ動かさない。呪文を唱え周りに魔力で構成された障壁が生まれる。

その障壁に男は絶対の自信を持っているのかずっと笑みを浮かべている。

相手との距離は近距離と中距離の間。

「……” 鯨牙大刀弾”」

銃口から魔砲光が発生し鯨のような形をした刀剣が発射される。障壁に刀剣の先端が刺さり一瞬だけ拮抗する。男は顔に嫌な笑みを浮かべた。

しかし、彼女は無表情で銃身を握り締める。いつの間にか練成を終えた彼女は連続で魔砲弾を撃つ。

「強化魔砲弾 壱式」

放たれた弾丸が鯨の刀剣に命中し剣の形が変わった。それは小型の” 鋼の龍” へと姿を変える。

「その程度の障壁なら一度の強化で十分だ」

鋼の龍の先端の刀が障壁と激突する。

そして、障壁が音も出でずに粉々に砕け散っていった。男は初めて驚愕の表情を浮かべる。

呆然自失とする男の真上へと刀で出来た首を振り上げる鋼の龍。

男は声も無く一刀のもとに両断される。辺りを染める紅き血。

長剣がその腕からゆっくりと地に落ちていく。血に染まる長剣。

「これも業だな」

女はポツリと呟き黒き銃を腰に収める。瓦礫の山を見つめつつ女は魔砲陣を練り出す。

「待て」

魔砲銃でその場を去ろうとする彼女の前に現れた一人の兵士。それはあの少年だ。

辺りに兵士は居なく老兵や少年の仲間数十人がその場に残っている。

「このまま、逃がして堪るかっ!!」

少年の瞳は怒りに満ちていた。このままでは家族に迷惑をかけ自分は大死だ。

剣に手を掛けた少年を動向を見守っていた老兵士が静かに押さえる。

その腕の中で少年が必死にもがくが当然ながら抜け出せない。

「俺たちが戦争でどれだけのものを背負ってると思ってたんだっ!!
それを……それを……」

少年は叫ぶ。心の底から……

女は瞳を瞑ったまま無言で魔砲獣を練成する。現れたのは巨大な
右羽が黒、左羽が白の鷹。

その鋭い爪が生えた足首に捕まった女は少年に一度だけ振り返る
とその場を去っていく。

「お前は永遠に許さないからなっ!!」

こんな戦火は終わらせてやる……私が……

彼女は自身の決意を新たに次なる土地へと飛び去った。

彼女は自身の望みどおり長きに渡る戦いに遂に終止符を打つ。己
の記憶と引き換えに……

それより十年後、彼女は子供の姿に身を窺し再び地に堕ちた。

——地上で一人の少年との運命的な出会いを果たして……

一装5, 5弾一魔を司る剣く序章（後書き）

初めて公開する二次創作です。あえて暈した部分もあるので想像力を働かせてご覧下さい。
では……

一装5, 5弾一魔を司る剣／前編

「ひ、姫。これ以上は速く出来ないよ」

青年が舗装された小さな道をおも／＼い足取りで歩いていた。それもその筈、背中には一人の少女を背負っている。

「おい、零。私は腹が減ってるんだぞ。私の番犬ならもっと速く動け！！」

急かす少女の言葉。それでも青年は足を速める事が出来ない。ずっと彼女を背負って歩き詰めだった事を考えればそれも無理からぬ事だった。

「ひ、姫。これ以上はさ、さすがに無理……………何でもない」

背中からの無言の重圧に青年は押し黙る。子供になってもやっばり世界最高の魔女。

滲み出る気配は流石に黒姫と言うべきか……………ナイスなボディや色気ムンムンなフェロモンは消滅してるが……

「お前は私が好きなんだろうっ！！　　だったら文句言わずにさっさと進め！！」

青年はその言葉に心の中でそっと涙を流しながら歩を進めていった。

ここまで文句一つ言わずに歩いた所は彼の少女への想いが成せる技なのだろうか。

そう、青年は少女に恋している。

少女は今でこそ、こんなチンチクリンな幼い外見だがその正体は世界最強の美魔女。

——魔砲使い黒姫——

十年前に神に盛大にケンカを売って盛大に返り討ちにあった悪名高い魔女だ。

”龍”を練り出せる稀代の魔砲使いにして恐怖の権化……

そんな彼女の腰には黒い回転式の拳銃を収めている。黒姫の証で

あるその黒き銃の名は旋龍と言った。

「ねえ、あれって村なんじゃない？」

そして、この青年の名は”零”。そんな魔女に恋する銃戦士。そして、通り名は”豪速四連銃の零”。

その腰のホルダーには四丁もの拳銃が収められている。客観的に見れば子連れの賞金稼ぎに見えるかもしれない。

「ん？ おおっ！ 飯っ！！」

少女、今の名である”姫子”は地面に足をつけると一目散に村へと走っていく。さっきまでの怠けた姿とはえらい違いだ。

零は苦笑いをしながら彼女の姿を早足で追いかけていく。二人は村の中へと入っていった。

――

「なんだよ、誰も居ないじゃねえか」

姫子は訝しげに辺りを見渡す。まだ日が高いのに辺りには人っ子一人居ない。

周りには寂れた宿屋に出店、民家などが全部が全部閉まっている。

「ホントだ。どうしたんだろう？」

家々の扉や窓は固く閉じられ閑散としている。でも人の気配は微かに感じた。

周りの風景も異常で建物や地面に刀傷のような跡が多々残されている。

間違いなくこの村では何かが起こっていた。

「おお、旅の方ですか？」

「うおう！？」

「わっ！？」

二人はその場を飛び跳ね、後ろを振り返る。見るとそこには白髭を蓄えた老人の姿。

いきなり二人の前に現れた老人に零は胸に手を当て、姫子は額に青筋を立てつつ老人を睨む。

状況からいって村人の可能性が高い。

「オイ、コラッ！！ 手前、老いばれのくせによくもこのくろふいめまも」

危険な単語を発しようとした姫子の口を零が慌てて塞ぐ。

愛想笑いを浮かべてその場を誤魔化す零。姫子は直もモガモガ言っている。

零は話がややこしくなる前に話題を変えた。

「あの、どうしてこの村はこんなに人気が無いんですか？」

それを聞いて蓄えた髭をゆっくりと撫で上げる老人。

「ふむ、一先ず諸々の話はワシの家でせんかの？ ささやかながら食事をお出ししよう」

「飯だって！？」

姫子は零を振り払うと一転して満面の笑みを浮かべている。その脳裏にはジューシーな肉やら何やらが色々と渦巻いていた。

「よし、コイツの家に行くぞおおおっ！！」

口から涎を流しつつ老人についていく姫子。一方、零の方は頭の中で今の姫子と黒姫の姿を重ねて溜息を吐いた。

（内面も子供になってる……）

複雑な気分を味わいながら姫子を追っていく零。それでも彼女を嫌いになれないんだが……

老人についていくと周りより少しだけ立派な家の前に止まった。

姫子は未だに飯だ、飯だと小躍りしている。

重い扉を開いて老人は家の中へと二人を迎えた。

「お邪魔します」と丁寧に挨拶する零と図々しくも真ん中のテーブル

ルに座って食事を催促する姫子。

老人は柔和な笑顔をその顔に浮かべ「ちょっと待ってくれんかの」と言って奥に入ってしまった。

しばらくするとテーブルの上には姫子が想像したような肉やスープやらと豪華な食事が並んでいる。

「まずは食べて下され。旅の方」

老人の言葉を待つまでも無く姫子は並べられた食事を一気に平らげていく。

「うーん、美味しいな。これも美味しいぞっ!!」

刹那の間にテーブルの半分の料理が消滅した。零はスプーンでコンクリームスープをすくって飲んでいく。

「美味しいですね。このスープ」

零の言葉に老人は嬉しそうに微笑み本題に入った。

「では、さっきの問いに答えようかの。おお、食べながらで構わんぞ」

スプーンを下げようとした零を押しとめる老人。零は遠慮がちに料理を食べ進めていく。

姫子は再び料理を食い荒らしていった。その小柄な身体の一部どこに入っているんだろうか？

姫子は机に足を乗せ大きく膨れた腹を擦っている。

気を取り直して話し始める老人。

「……今から十年前、我が村で呪われし剣が猛威を振るっていたの……」

その名は憑いた人間の名を借り”エペタム”その刀は人を依り代に三日三晩暴れ回ったんじゃ」

老人は昔を思い起こしながら訥々と語っていた。

零は真剣に聞き、姫はバクバクと料理を食い散らす。

「じゃが、その惨劇に見かねた武具の神が”エペタム”を祓い憑かれた人間を土に還した……」

そして魔力が残ったその刀をこの村の守り刀として授けたんじゃ」
神という言葉に姫子がピクッと初めて反応する。

「神が人を助けたあ？ 奴等は人助けなんて事はしないぜ」

姫子は忌々しそうに虚空を睨んでそう吐き捨てる。

「そいつは多分、神の使いっぱしりの低級天使さ」

神とは浅からぬ因縁を持つ姫子。感情がいつもより高まってくる。

老人は一呼吸置いて再び話し始めた。

「エペタム」は先々代の村長に預けられ今の村長であるワシに受け継がれた。

村はその後十年間、守り刀の恩恵を授かり平和だったんじゃが……」

老人は意気消沈と言った感じで更に話を進めていく。

「十年前に憑かれた者の骸が何の前触れも無く甦ったんじゃ。骸は”エペタム”を持ち去り、毎晩、村の者に襲い掛かる。それが村の者が外に出たがらん理由だ」

老人は額に深いしわを刻んで小さく溜息を吐く。その瞳には強い愁いを漂わせていた。

「そこで頼みがあるんじゃ、旅の方。”エペタム”を壊してくれんかの？」

ワシが見たところおんしらはかなりの強さを持つ者とお見受けする……頼めんかの？」

老人はそう言って頭を深く下げる。慌てて止める零。

「ほっとけ、ほっとけ。面倒なだけだし」

そう言って姫子は重い扉を開く。しかし、零はその場を動かない。

「僕は十年前に姫から正義を教えて貰ったんだ。この銃に誓って助けるよ」

そう言って零は四丁の銃に次々と弾丸を装填していく。

（また、始まったよ……）

姫子は呆れ果てながら零に振り返る。

「それに一食の恩は絶対に返さなきゃ」

零は明るい笑顔でハッキリと言いつ切った。

老人は申し訳なさそうに零を見ながら「ありがとう」と言っ
て再び頭を下げる。

「へん、勝手にしろ」

姫子はそう言って家から出ようとする。

「待ちなさい。今の時間は森の中でエペタムを手にした骸が爪を研いでおる。今日はここに泊まっていきなさい」

その言葉に慌てて零が姫子を止める。

「お願い、姫」

老人と零の言葉に涉々と言った感じで姫子は舞い戻る。

「でも、手助けはしないからな」

不機嫌そうな姫子。

「うん、分かってるよ」

膨れっ面で拗ねる姫子をなだめつつ零は笑顔で言い切る。

それは強がりでも思い上がりでもない事は彼が発する雰囲気
で知る事ができるだろう。

「エペタム」は宵を過ぎてから姿を現すんじゃ。頼みますぞ」

老人の言葉を最後に零は村の入り口へと向かう。姫子は宛が
われたベットで早くも夢の中へと旅立って行った。

来タ。クロ姫ガ……

骸はそう呟き手元の長剣をゆっくりと握り締めひたすら闇を待つ。
己が復讐の為に……

一装5, 5弾一魔を司る剣／中編

日は沈み宵を迎えた小さな村。月が辺りを淡く照らし出している夜。

零は村長の頼みから半刻ほど村の入り口で骸を待ち伏せていた。零の首に巻いたマフラーが風になびき、吐く息はすでに白い吐息へと変わっている。

冷え込んだ夜。零はもう少し着込んだ方が良かったかと思う。今は肌寒い外に自らを抱きしめて我慢していた。

気を使ってさっきまで居た村長には零が「姫を頼みます」と言っ
て帰って貰っている。

零は瞼を閉じてひたすらその時を待った。

———キリキリ

「え？」

——キリキリ

零は二丁の拳銃を取り出し慎重に構える。入り口の向こう側から
”ゆらりゆらり”と現れる”ナニ”か……

かくして現れたそれは零の予想を遥かに超えていた。

錆びた鎧を着込んだ骸骨。骨丸出しの腕で刀身が長い刀を握って
いる”ソレ”

相手の容姿に零の反応が刹那の間、動きが鈍ってしまう。

(これは??)

身体中から強烈なまでの殺意をみなぎらせていた。

「くっ!!」

零は瞬時に戦闘体勢に入る。四丁の拳銃を華麗に捌きながら豪速

の名に相応しい凄まじい連射が放たれた。

次々と銃から排出される空薬莖。弾丸が全て骸骨へと吸い込まれていく。

(っ!?)

骸骨は長剣を盾に迫ってきた。零はあまりの速さに目が追いついていかない。

とっさに零は身体を海老反りさせた。髪の毛をかすり強烈な斬撃が真上を一閃する。

零を無視して駆け抜けていく骸骨。その先には姫子が眠る村長の家だけ。

かすった黒と青の髪の毛が地面にパラパラと落ちていく。

(姫っ!!)

零は急いで骸骨を追い掛けようとし……しかし、胸に鋭い痛みを受けて動きが鈍った。

見ると胸についた一筋の刀傷。血は止まるどころかドクドクと流れ続けている。

零は痛みを堪え無理やり走り出した。飛び散っていく鮮血は血の足跡を作っていく。

(――早く逃げて、姫っ!!)

「な、なんだっ!?!」

涎を流しながら爆睡していた姫子はバツと跳ね起きた。

(……零?)

「今、零の声が聞こえたような?」

ポツリと言って辺りを見渡す。見ると奥から怪訝そうな表情を浮かべた村長が現れた。

「どうかしたかの?」

村長はそう言って姫子を覗く。姫子は言い知れぬ不安を感じていた。

「おい、ぜ――」

突如、何かが壊れる衝撃音。

「なんじゃろう？」

村長が疑問の声を上げたのも束の間。薄い壁越しに一筋の斬撃。壁を粉碎し現れたのは長剣を構えた骸骨。

（あれは！！）

その剣を見て姫子は驚く。

「くっ！！」

村長は立てかけた剣を取り鞘から抜きさった。無謀にも骸骨に戦いを挑む村長。

彼らは剣を結び合うがやはり力の差が浮き彫りになる。

彼の剣を容易く払った骸骨は無情にも村長へと剣を振りかぶった。それは胸を切り裂こうとする。

その剣腹に直撃する弾丸。それは骸骨を吹き飛ばし壁を一気にブチ破っていった。

村長はその衝撃で向かいの土壁に思いっきり叩きつけられる。苦悶の表情を浮かべる村長。

「おい、お前はどこかに隠れてろ！！」

そう言って姫子はその場から離れる。体勢を立て直し素早く後を追う骸骨。

（あり？　なんでオレさまが人助けなんかしなきゃいけないんだ？）
気がつけば身体が勝手に動いていた。疑問に感じながらも姫子はうつそうと茂る森の中へと逃げ込む。

後ろを見れば骸骨が不気味に笑い追ってきていた。

「おによれ、これでもくらえっ！！」

姫子の周りを魔砲陣が発生し練成が始まる。

「おりゃっ！！」

魔砲光と共に放たれた魔砲弾————の出来損ない。

それは骸骨の前まで来たがビックリしてその場をなんと逃走する。本当に弱っちい。

「くしょー、まだ魔力が弱まってるから」

姫子は身を翻して慌てて深い森の中を逃げていった。

「きゃあああああ、零おおっ!!」

泣きじゃくって逃げるその姿には威厳とか世界最強の美魔女の面影とかは微塵も残されていなかった。

――

「姫っ!!」

激痛に苛まれながらもなんとか村長の家に辿りついた零。取っ手が壊れた扉を力任せに開く。

すると向かいの壁にうずくまり苦しんでいる村長。零は急いで彼の元へと駆け寄る。

「大丈夫ですか村長さん!!」

零に優しく起こされた村長。意識は朦朧としているが生きている。「あの、お嬢さんは……走ってあっちに向かった……」

穴が開いた壁の向こう、森の方角を指差す村長。

「早く行きなされ。ワシの事は構わんから……」

そう言って村長は再び意識を失う。零は瞼を閉じて迷った。

(きゃあああああ、零おおっ!!)

「っ!!」

零は意を決するとその場から全速力で走った。

土に残された足跡を必死で追いかけていく零。森の中に入り必死に追いかけるがその足跡がぶれる。

いや、風景が歪んで見える。意識が朦朧としてきた零。

木に手をつけ荒い息を吐く。流れ出る血は益々勢いを増していた。それでも彼はゆっくりと……おぼつかない足取りで歩を進めていく。

……足元に合った木の根につまずき体勢を崩した。それでも地を這いながら足跡を追いかける。

しかし、五歩ぐらい進んだ所で足跡がぷつぷつりと途絶えてしまう。
「どうすれば……」

その言葉も弱く、痛々しい。

「姫……姫……待ってて」

零は己を奮い立たせ歩き出した。じくじくと痛む傷。最早それでも彼は止まらない。

—そこを右に行け—

「え？」

—急げっ!!—

零はその言葉を信じて零は右へと疾走していく。痛みはすでに許容量を越えているが最早彼そんな事を超越している。

（姫っ!!）

その後姿を見守る一つの影。

（……果たして間に合えるのか？）

影はそう考え、かぶりを振って思い直す。

「……私は主の命を果たすだけ……ここで倒される者に用など無い」
そう言っつて影はその場から姿を消す。後にはサワサワと揺れる枝の音色だけが響いていた。

——

追イ詰メタ。骸骨から発せられる不気味な声。

「ヤバイ……」

姫子は遂に森を抜けてしまい小さな池へと追い詰められてしまう。その小さな足の所々には枝や根で浅く傷ついていた。

（オイラ、こんな所で死にまうのか？）

ゆっくりと迫ってくる骸骨。その殺気は倍以上に膨れ上がる。

「ヤット……コノ無念ヲ晴ラセル」

骸骨から発せられた言葉に姫子はやっと確信した。

「やっぱり、その剣は”怨念の長剣”あの”復讐の大剣”と対を成す呪われし武具」

骸骨は無言でその場に佇んでいる。

「現れたのが十年前なら丁度時代も合うからな」

姫子は得意気に骸骨を見上げる。骸骨は彼女にゆっくりと告げた。

「ソレガドウシタ」

「へ？」

姫子にとっては予想外だが客観的には予想通りの答えが返ってくる。

「……オレハオ前を殺レレバ良イ」

積年の怨念を募らせ姫子へと近づいていく骸骨。

「オイ、コラっ！ オレさまは、お前に怨まれる憶えが無いぞっ！
！」

過去にしてきた極悪非道な所業を棚に上げて言いきる姫子。

まあ、あながち嘘でもなく彼女は神に挑んだ以前の記憶を神に奪われている。

「終ワリダ」

姫子の言葉を見殺しにして長剣を振り上げる骸骨。刀身が月光に照らされ哀しい輝きを放っていた。

（零っ！！）

姫子は最後に心の中で零を呼ぶ。無情にも剣は振り下ろされた。

「零……！！」

姫子は目を瞑ってあらん限りの声で零の名を呼ぶ。凄まじき剣速で振り下ろされる長剣。

——澄んだ金属音が森の中へと響き渡る。驚き夜空に羽ばたく鳥の群れ。

壱と刻まれた銃が刀身を受け止めている光景が目に入る。辺りは

鳥が落とした白き羽が舞い散っていた。

——ドクン

「……無事で良かった」

現れたのは姫子が待ち望んだ者。一陣の風が吹き荒れ白い羽が舞い上がる。

その白き羽から覗いた顔は……零。

——ドクン

彼は姫子に笑いかけると力尽きたようにその場に崩れ落ちた。彼の下から血が徐々に辺りを紅く染めていく。

——ドクン

一筋の刀傷が致命傷である事は誰でもすぐに分かる。

（こんなになるまで私を助けに来てくれたんだ……）

——ドクンッ！！

一際大きな鼓動と共に姫子の姿が変貌していく。身長は一回り成長し髪は伸びて絹のような艶のある長い髪に変わる。

身体は漆黒の衣装に包まれ弾力のある肢体へと……

背中から覗く黒い木はあらゆる魔力を弾くと言われる”黒神木”

その場に満ちていく神にも等しい激しい氣が辺りの木々を震わせていく。

「ひ、姫……」

朦朧とする意識の中でその神秘的な光景を見つめる零。

「——私が世界最強にして最高の美魔女。魔砲使い黒姫さ！！」

呼応するように突風が彼女に吹きつける。周囲の木々がよりいっそう震えた。

一装5, 5弾一魔を司る剣〜後編

「――私が世界最強にして最高の美魔女。魔砲使い黒姫さ!!」

周囲に神々しい気が満ちていく。黒姫は腰のホルダーから素早く旋龍を取り出した。

魔砲陣の発光と共に練成が始まり程なく銃口から魔砲光が迸る。

黒姫はそれを迷うことなく零へと撃ち込んだ。すると零の傷口から木の幹のような物が生え幹が桜の花弁となって舞い散る。

見ると致命傷であるはずの傷痕が消滅していた。傷があった場所を恐る恐る撫でる零。

「あ、ありがとう。姫」

零は顔を真っ赤に染め上げオドオドと礼を言った。それを軽く流して目の前を見つめる黒姫。

「貴様ハ殺スッ!!」

刀を振り上げ黒姫に斬りかかる骸骨。刀は凄まじい速さで彼女に吸い込まれようとする。

「鋼鎧五体弾」

いつの間にか練成した魔砲弾を自らの身体へと撃ち込む黒姫。

刀身を鋼鉄化した腕で受け止めると同じく鋼鉄化したそのしなやかな足で骸骨を蹴り飛ばす。

浅い小池に水飛沫を上げて突っ込んでいく骸骨。

池の中心で体勢を戻そうとして堪らず膝をつく。その向こうには巨大な大岩が悠然と構えていた。

「世界最強の美魔女であるこの黒姫様を虐めてくれたんだ。覚悟は良いな」

そう言って練成を始める黒姫。同時に凄まじい魔力が辺りを共振させる。

「これで止めだ。鯨牙大刀弾!!」

放たれた鯨型の刀剣が一気に骸骨を貫く。パラパラと崩れ去る骸

骨は灰となって消えていった。

「……終わったの？」

圧倒的な勝利を呆氣に取られながら見ていた零。黒姫に恐る恐る聞いてみる。

「いや、まだだ」

彼女の視線の先に目を移して零は驚く。独りでに”エペタム”が空中に浮いていた。

——我が積年ノ恨ミハコノ怨念ノ長剣ニ宿ッテイル。

「ひ、姫。怨念の長剣って??」

慌てて銃を取り出しながら零は黒姫に尋ねる。

「あの”復讐の大剣”と対を成す呪われし剣だ。その剣に籠められし怨念が晴らされるまで……永遠に彷徨い殺戮を続ける剣」

黒姫はその場を動かずに再び練成を始める。零は黒姫と”エペタム”の間に割り込んだ。

しかし、剣は零を無視して黒姫に矛先を向ける。

零は空中を駆け抜ける剣へと連射を仕掛ける。動きが鈍った剣の柄をとっさに零は握った。

「ぐううう!!」

直接、流れ込んでくる怨念。それは家族を失い絶望に打ちひしがれる者の記憶だった。

「縛鎖蛇弾」

旋龍の砲身から蛇のような鎖を発射される。それは零が握る剣の刀身に巻き付き完全に動きを拘束した。

——それをほとりの大岩に突き刺せっ!!

「え？」

零に掛けられた声。彼は流れ込んでくる負の感情を押し込め一步一步ほとりの大岩へと歩いていく。

鎖を解こうと必死にもがく剣を零は思いっきり大岩へ突き刺した。

大岩に亀裂が走り中から白い光が漏れ出してくる。零はその腕から剣を開放した。

——コノ怨ミ……晴ラス……マデ……

その言葉を最後に剣の刀身が粉々に砕け散っていく。零は複雑な気分ですそれを眺めるしかなかった。

「終わったんだね……今度こそ」

零は剣の破片を拾いポツリと呟いた。池の表面にはいくつもの破片が浮いている。

「そうだな」

黒姫はホルダーに旋龍を収めて零へと近づいていく。そうして後ろから零を抱きしめた。

「へ？」

鳩が豆鉄砲を食らったように”ポカン”と口を半開きにする零。

（え、え、え？）

「ハハハハハ、冗談に決まってるだろ」

そんな零の顔に黒姫は堪らず笑い出した。本人はからかうつもりでやったらしい。

「私の番犬がそんな暗い顔してるところまで辛気臭くなるだろ」
零は未だに現世に帰ってきていない。黒姫は彼の前で天を指差すと言いつ切る。

「それに、世界で唯一無二、最強にして最高の美魔女であるこの黒姫様がお前みたいな青二才に惚れるわけ………あれ？」

天に指差した腕をまじまじと眺める”黒姫”。呪いでまたまた、チンチクリンに戻っている。

（またかよ……）

ガツクリと肩を落とす黒姫。現世に復帰した零は慌てて彼女を慰める。

（黒姫に……抱きしめられた）

脳裏ではさっきの感触がずっと繰り返しがっていたが……

「うるさいな」

唐突に聞こえる子供の幼い声。

「あん？」

「え？」

二人は大岩へと目を向ける。

――砕けた大岩に座る小さな女の子がそこにいた。

「なんだ？ この芋虫女」

姫子は無言で余りに小さ過ぎる女の子を指で摘み上げて言う。

（……芋虫）

零は内心で暴言を止められなかった事を後悔していた。根っからの優しい男だ。

「オイラは”威太刀”っていう立派な名前があるんだっ！！」

芋虫の言葉が御気に召さなかったのか威太刀はワンワンと喚く。

「その名前から考えるとやっぱり天使だな」

姫子は摘み上げた威太刀を半眼で凝視する。

「そうだ。武具を司る天使なんだぜっ！！」

どうだ、と言わんばかりに鼻を伸ばす威太刀。その視線が池に浮かぶ”エペタム”の破片へと止まる。

「あああああ、エペタムじゃないか！！」

”エペタム”を拾い上げ威太刀は泣き始める。

「ど、どうしたんだよ」

姫子が少しひきながらぐずる威太刀をまた摘み上げる。

「これは私が封印していた刀なんだ」

未だにぐずりながら話し始める威太刀。

「死神様に不手際をしてしまった私は罰としてこの大岩で”エペタム”の封印の任についていたんだ。

でも、十年間も飲まず喰わずだったからついウトウトして……」

しゅんとする威太刀。姫子は無言で摘み上げた威太刀に力を込める。

「い、痛い、痛いっ！！」

「要するにお前が居眠りしたから”エペタム”が復活しちゃったんだろっ!!」

そう言って一言の元に切り捨てる姫子。零がまあまあとなだめる。「しかも、お前は天使だろ! それが、たかが十年でええええ」

「オイラ落ちこぼれだから……寝ぼけて破光を出したりするしさあ(あれかな?)」

零はさっき大岩から漏れ出た奇妙な光を思い出す。

直もギャアギャアと言い合う二人をなだめる零。

「おい、二人とも!!」

森の奥から村長の声がこちらまで響いてくる。

「やべっ!! オイラただの人間の前じゃ姿を現しちゃいけないんだっ!!」

そう言ってその場を消えていく威太刀。辺りを奇妙な輝きが満ちていく。

「私はともかく零に見せてんじゃん、お前」

その言葉に威太刀が零を見つめる。青い瞳と赤い瞳のオッドアイに覗き込まれる零。

「コイツはただの人間じゃないから大丈夫さ」

「えっ? それってどういう……」

しかし、零の疑問には答えず威太刀はその場から光の粒子を上げてその場から姿を消す。

直後に現れた村長と共に彼らは一先ず村へ帰った。悪態を吐きまくる姫子を苦勞して連れながら……

――

一夜経って……

「ねえ、一体なんだったんだろうね？ あの時さまの言葉……」
零はぼんやりと姫子に尋ねる。彼らは村長の家に一泊し再び旅を
続けていた。

「ほっとけ、どうせ大した意味は無いさ」

姫子は頭の後ろで手を組み無然と言い返す。

「そうかな？」

そう言って零は口を閉じる。

「ん？」

姫子は立ち止まると後ろに目を向けた。その視線の先には小さな
木。

（あの気配は……）

「姫、どうかした？」

「ん、なんでもねえや」

——そう言って二人は長き道のりを再び歩き出した。後に待ち受
ける壮絶な最後へと一步一步突き進んで……

一装5, 5弾一魔を司る剣（後編（後書き））

自分の好きな漫画を書いて凄く嬉しかったです。

キャラ描写に苦労しプロットから外れた所も多々ありましたが……

まだまだ、納得できない点もありますがこれから努力していきたいと思います。

では……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8142a/>

魔砲使い黒姫－魔を司る剣－

2010年10月8日15時27分発行